る點だと思ひます。かゝる繪はいつまで見てゐても見飽のせぬものです。

▲寫眞版のエッチングは簡潔なる繪であります、銅版と申しても彼地には一枚百圓二百圓の品は珍らしくありません、それは皆畫伯自ら彫刻したもので、甚しいのは五六枚刷つて後は版を潰して仕舞ふため其やうに高價となるのであります。

寄書

水彩畫と宗教

神奈川　T生

人の一生涯を通じて、最も愉快に、最も希望に滿ちてあるべき青年時代を、僕は今淋しく病牀の上に過しつゝある。

此悶々の情を宗教に依て慰せんか、それには僕の頭腦が餘りに科學的である。

處が水彩畫を習ひ初めてから、僕は一枝の畫筆に依て、然もいかに多くの慰藉を得つつあるであらうかよ。

實に水彩畫の人の心をピューリティーならしむる力は、遙に迷信多き宗教の上にあると思ふ。水彩畫を學ぶ多くの青年諸君の中には、僕と感を同ふせらるゝ方も少くないと考へる。

手製の三脚床几

福知山　今井　英世

三脚の必要は毎度感じるのですが、東京から取寄せるのも高價につくし、土地には賣つてゐません、因ていろ〳〵工風の上、妙な道具を案出しました、御同感の諸君の御參考迄に御報致します。

まづ餘り太くない一尺五寸位ひの丈夫な竹を三本とつて、上から五寸位ひの場所を針金線で強く固く結び、脚を三方に擴げて、上に出來た三端には、一尺四方位ひの稍厚い板を置き、丁度其竹の端の上に、五寸釘の自由に通る程の穴を穿ち、其穴より竹の中へ釘をさして板の辷らぬやうにします。釘さへとれば、自由に疊めて、持運びにもさして不便ではありません。

（このやうな投書を歡迎いたします（編者））

水彩畫に志せし動機と初寫生

中藤　素菊生

私は元來繪が好で、小學時代から毛筆鉛筆畫などを書て居た、學校を終へて遊學の身となり、居候生活の内、朝夕文房堂の店先に、第一に目につくのは水彩畫で有る。繪が好で有るから能く見て來ては厚紙へ極安の繪具で畫て見たが面白くない、是非水畫を學ひ度いと思ふ内東京堂で水彩畫の栞を見出し早速それに頼よつておぼつかなくも畫き初たのが明治卅六年の三月。東京をよして郷里へ引き込てから、やたらに水畫の手本を買て習つて居るうち少しは、水彩畫らしいものがかけて來た、そこで一番戸外寫生を試みんと自分作りの三脚椅子をかつぎ出して、田の中の三ツ橋と云ふ所を寫生して見たが、机の上と事かわり思ふ樣に色の配合も出來ず筆も廻わらず、いやはや畫にならばこそ、實にお可笑な物が出來た、内一番むずかしいと思つたのは、立木と橋へ日光の射した具合と田面へ寫る樹木の具合であつた

各地寫生會

●いもや會。所在遠江國山梨町○會員松村操、比奈地畔川、幡鎌由一、石塚非石、鈴木無里、内藤六丁其他○隔月一回集會自作の水彩畫を陳列して批例投票を行ふ（内藤

六丁氏報）

●丹青倶樂部。所在京都商業學校○會員飯野芳太郎、鈴鹿榮、前川英三郎、南淳三、中西二郎、井山政造、川瀬光一郎、磯貝眞之助、吉川松五郎、桂平三郎、長谷川貞造、北村定次郎○創立本年三月○月一二回寫生會を開く○會員の作はアルバムに挿み保存す○アルバムは會員順次に回覽す○毎月一回會誌を發行す（北村定次郎氏報）

豫告

■諸君の御希望により、十一月頃本會から主任大下藤次郎筆の畫帖を出します。其繪に多大の注意を拂ひしは勿論、製版印刷共すべて價を拂はずやらしてありますから、多少滿足なものが出來ることと自信して居ります。

雜聞

▲八月の繪葉書競技會は暑中休みて在京の會員少なく、僅に大田南岳、山田全二、小林華秋の三氏に靑梅よりは津雲氏、きぬた會の松田氏が見えられた。

▲出品の繪には隨分面白いのが澤山あつた。意匠の部には、跡を後と同一視したのが多く、これ等は選外としたが、中には惜しいのが澤山あつた。

▲意匠といふても、たゞ思ひつき許りでは困る。異なつた思つきなら何でもよいといふ譯ではない。其意匠は高尙でなくてはいけぬ。美化されてゐなくてはいけぬ。位置や配合にも注意されたい。此度の課題の中にも、跡といふのに、酒の跡で德利の倒れてゐるのや、背中に大きな炙の跡などあつたが、是等は餘程うまくかゝぬと物にならぬ。

▲兼て噂のあつた平旦といふ雜誌が出た。菊地容齋論は大に見るべきものだ。暗中語は穿つてゐる。併しかゝる記事は所謂樂屋落ちて、一般讀者には何の事だかわかるまい。

▲挿繪は皆面白いが、是も一般の人に其妙味を知らせるとは難いであらうと危まれる。鹿子木氏の裏繪は思切つてやつたものではあるが、かゝることが、美術の進歩上益あるべしとも思へぬから、他の方向の諷刺を願いたいものである。

▲日本葉書會の展覽會は、盛會のうちに閉ぢた。出品の數の多いので、只ボーとする許り。はがきのやうな細かいものは、矢張りアルバムに挿んでお座敷で見るものであると思つた。

▲泰錦堂からは印刷順序を示すべく本誌の口繪の一から三迄を出品した。これを見た人は、製版印刷の苦心を察せらるゝであらう。

▲松聲堂から、本會エハガキの第二輯を發賣した。第三輯も不日發賣するであらう。第三輯は、本會同人の丸山晩霞氏の筆で、淺間山下の四季の風物を描いたものだ。氏の筆で版になつたものは少ないから、慥に珍とすべきものである。

▲本會の鵜澤四丁氏は、豫て米國ヴアンダイク氏の繪畫鑑賞法といふ書を飜譯中であつたが、此程脫稿、世に公にせらるといふ。

▲繪畫の趣味普及に熱心なる木田寬栗氏は、曾て大日本繪畫會を起し、日本繪の講習錄を世に頒たれてゐたが、今度更に洋畫講習錄を出さるゝとのことだ。常に繪を見るの機會に乏しき地方人士は、これによりて益する事多からう。

▲神田駿河臺南北屋より近きに發賣さるべき花のゐはがきは、なてしこ、よめな、山茶花の三種にして大下藤次郎の筆になり明晰なる解剖圖を添へ其天然の情體を水彩の景色畫として對照の便に供してあるもので教育用及臨本を兼ねたるものである

■次號よりは石井栢亭氏の『われの水繪』と題する有益なる記事、二三號に渉りて連載さるべし。

■みづゐ再版出來、初號より御注文に應ず。賣捌店に無之時は本會へ直接御注文を希望す。